

倉敷市立中庄小学校の研究

研究主題

課題に迫るために、めあてをもち、 夢中になって学び続ける子どもの育成

1 研究主題設定理由について

体育科においては、「体育や保健の見方・考え方を働かせ、課題を見つけ、その解決に向けた学習過程を通して、心と体を一体として捉え、生涯にわたって心身の健康を保持増進し豊かなスポーツライフを実現するための資質・能力を育成する」ことを目標としている。体育科で育てたい資質や能力を育むためには、「何を学ぶか」「どのように学ぶか」そして「何ができるようになるか」を大切にしていける必要がある。つまり、自ら課題に向かって追究していくこと、他者と相互にかかわり対話的に学ぶこと、さらに、学びで得た知識や技能などを次に生かす活用力を育むことが希求されていると考える。

本校の子どもは、全体的に素直で明るく、人懐っこいが、最後まで粘り強くやり遂げる気力に欠ける面も見られ、経験したことが積み重なりにくい子どももいる。また、自己主張はできるが、友達とうまく協力できなかつたり、トラブルを解決できなかつたりする子どももいる。

運動面では、運動することが好きで、体育の学習にも喜んで取り組んできている子どもが多い。しかし、できないと自分で決めつけていたり、できることしかやらなかつたり、できないとすぐにあきらめたりしてしまう子どももいる。また、友達との競争を避けようとしたり、友達に活動を見られることに抵抗を感じたり、共に学ぶ友達に心と体を閉じやすい子どももいる。一方、スポーツクラブや少年団で熱心にスポーツ活動に取り組み、自分の力を伸ばしている子どももおり、運動経験や運動感覚において二極化が進んでいる。運動経験や運動感覚において優れている子どもでも、限られた運動しか能力を発揮できない子どももいる。

このようなことを踏まえ、子どもが運動や健康の課題に迫るために、具体的に「やってみることをもち、主体的に学び、考え、友達と協調しながら夢中になって取り組む中で、身に付けた力を自分の生活の中で生きてはたらく力として活用していくことができる心や体を育むことが大切であると考える、研究主題『課題に迫るために、めあてをもち、夢中になって学び続ける子どもの育成』を設定した。なお、「課題」、「夢中になる」は、次のように捉えている。

課題	「課題」とは、体育科学習における、 ・「挑戦課題」：運動の本質的なおもしろさに迫るものであり、子どもが何を追究していくのかを明確に示した課題 「健康課題」：健康や安全に着目し、自発的に疑問をもって探究し続けられる課題 ・「問い」：「挑戦課題」・「健康課題」をより具体的・多角的に捉えた課題
夢中になる	「夢中になる」：課題を追究する過程で生まれる疑問から、自ら「めあて」をもち、できるかできないか「わくわく」しながら挑戦し続け、試行錯誤している状態

2 研究主題に迫るための「目指す子ども像」について

課題に迫るために、めあてをもち、夢中になって学び続ける子どもの育成

上記の研究主題を受けて、各学年部で発達段階に応じた子ども像を設定し、学びの姿を明確にし、県小体連の研究主題に迫っていくことにする。

低学年：めあてをもち、運動遊びを楽しむ子ども

だれとでも仲よく、運動遊びに取り組む子ども

進んで運動遊びに取り組む子ども

中学年：自分に合っためあてをもち、楽しく活動し続ける子ども

友達のよさに気づき、ともに喜び合える子ども

進んで運動や健康の課題に取り組む子ども

高学年：自分やグループに合っためあてをもち、楽しみながら運動する力を高めようとする子ども

健康でい続けるために学習した知識をもとに生活に生かそうとする子ども

互いのよさや違いを認め合い、助け合う子ども

意図をもって積極的に運動や健康の課題に取り組む子ども

「めあて」、「よさや違い」、「運動する力」を次のように捉えている。

めあて	<p>「めあて」とは、子どもが今直面している課題に対して、自発的・内発的にもつものであり、学習の過程への関心を強調するもの。</p> <p>「めあて」の中身</p> <p>目標レベル・・・体育科の目標，単元のねらいになるめあて（願い）</p> <p>活動レベル・・・運動のおもしろさに触れながら「できる／できない」があるめあて。活動選択。</p> <p>具体レベル・・・子どもが自分自身の課題に照らし合わせながら立てるめあて。活動決定。</p> <p>*中庄小学校では、特に、具体レベルの「めあて」をもつことができるような支援を考えていく。</p>
よさや違い	<p>「よさ」とは、体育学習における、</p> <ul style="list-style-type: none"> ・取組，豊かな人間性 ・アイデア・試み・対応のよさ ・わかったからできる，やってみてわかることの共有や活用のよさ <p>「違い」とは、体育学習を支える、</p> <ul style="list-style-type: none"> ・体格や体力の違い ・運動感覚や運動体験の違い ・考えや取り組みの違い ・人間性の違い
運動する力	<p>運動を楽しみたいという思いをもち，様々に運動にかかわる力。</p> <p>運動と自分とを結びつけ，課題を見出す力。</p> <p>必要感をもって使える知識や技能を身に付ける力。</p>

3 研究仮説

子どもが何を学び続けるのか明確に分かる「課題」を設定し、仲間と共に課題追究していくプロセスの中で、「運動（遊び）のおもしろさ」を大切にしながら、よりよい試行錯誤を促す支援を行えば、子どもが「夢中になって」学び続け、「目指す子ども像」に迫ることができるであろう。

4 研究の視点（夢中になるための研究の視点）と研究組織について

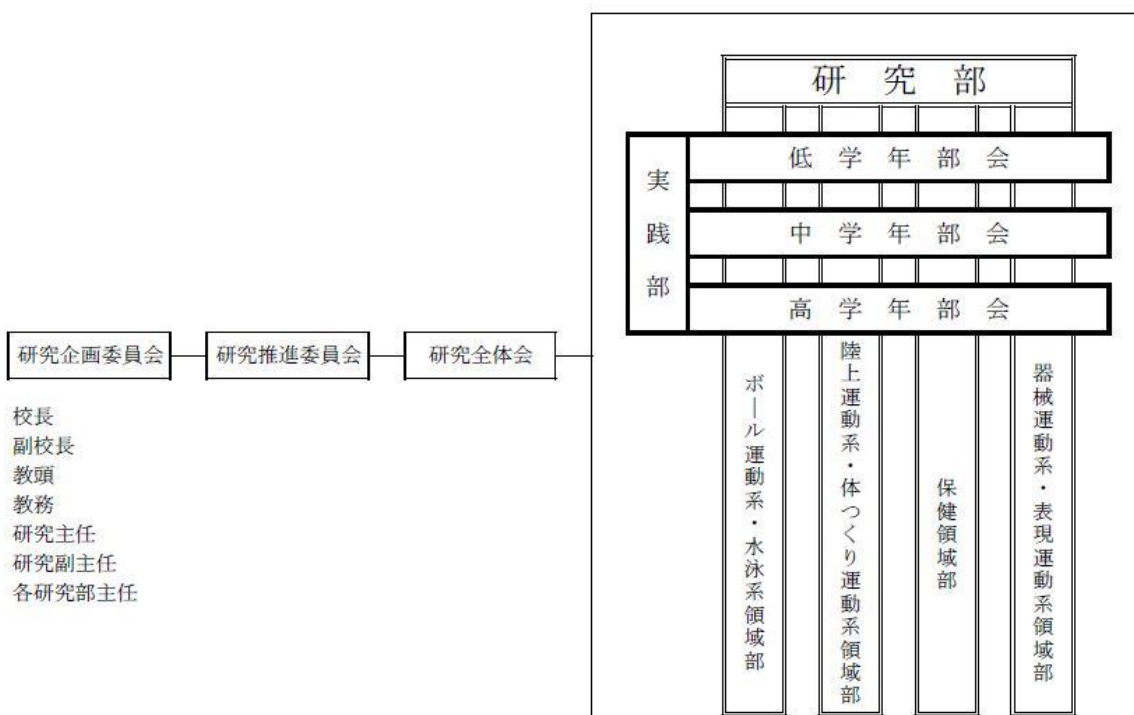
○ 単元構想の工夫

- ・ 運動の本質的なおもしろさや健康に関する追究していく内容の捉え
- ・ 運動や健康に関する課題との出会わせ方（挑戦課題・健康課題の共有の仕方）
- ・ 子どもの思考に沿った、「問い」の設定（学びの文脈づくり）

○ 「めあて」をもち、運動のおもしろさを広げるための支援の工夫

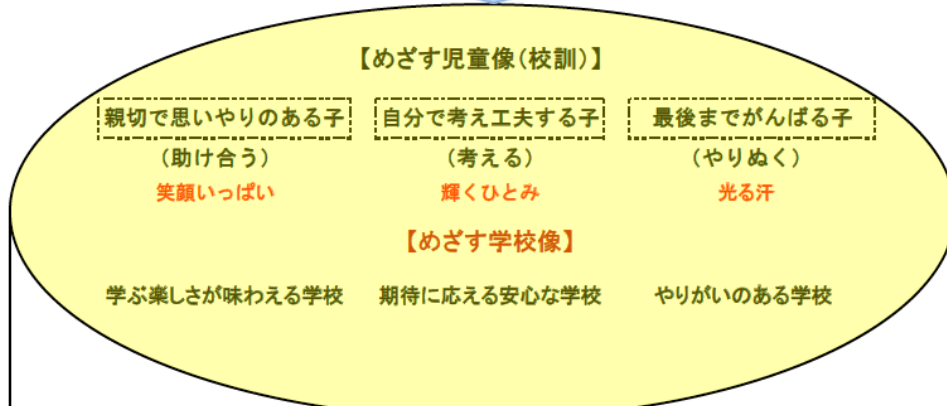
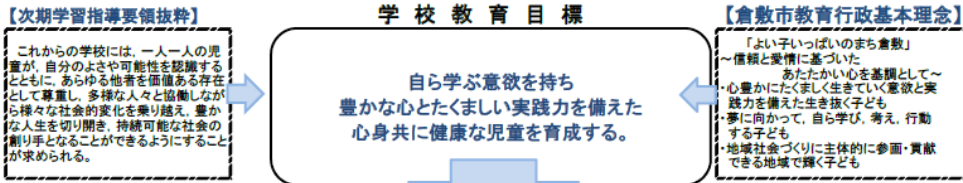
- ・ 「もの」とのかかわりから
場や空間の設定の工夫
用具の工夫
- ・ 「仲間」とのかかわりから
グルーピングの工夫
ルール設定
- ・ 「自己」とのかかわりから
「追究のための手がかり」の精選
振り返りの仕方の工夫

研究組織図



平成30年度

学校体育全体構想図



◎ 指導の重点

確かな学力の向上	落ち着いて学べる環境	地域に貢献する人材の基盤
<ul style="list-style-type: none"> ○ わずかな伸びや変化を認め、意欲の向上と学び方の習得を図る。 ○ 「学習で大切にしたい基礎的な事柄」に沿った授業実践に努める。 ○ 体育科授業研究を生かし、日々の授業改善に努める。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 自他を尊重する心の育成を目指し、一人一人を大切にすることを充実させる。 ○ 新しい自分を発見し、より個性を伸ばせる機会を設ける。 ○ いじめ、不登校、問題行動等へ組織的、機動的に対応する。 ○ 安心・安全で充実した学習環境の整備、充実を図る。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 基本的な生活習慣の確立を目指した取組を充実させる。 ○ 家庭や地域と連携・協力し、地域全体で子どもを育てる環境づくりを一層推進する。
特別支援教育の推進 ○特別支援教育の観点を生かした、どの子どもにもやさしい授業づくりを追求する。		

小学校体育研究

研究主題

課題に迫るために、めあてをもち、夢中になって学び続ける子どもの育成

体育を通して育てたい「目指す子ども像」		
【低学年】	【中学年】	【高学年】
・めあてをもち、運動遊びを楽しむ子ども ・だれとでも仲よく、運動遊びに取り組む子ども ・進んで運動遊びに取り組む子ども	・自分に合っためあてをもち、楽しく活動し続ける子ども ・友達によさ気づき、ともに喜び合える子ども ・進んで運動や健康の課題に取り組む子ども	・自分やグループに合っためあてをもち、楽しみながら運動する力を高めようとする子ども ・健康でい続けるために学習した知識をもとに、生活に生かそうとする子ども ・互いのよさや違いを認め合い、助け合う子ども ・意図をもって積極的に運動や健康の課題に取り組む子ども
研究の視点		
視点① 【単元構成の工夫】	視点② 【めあてをもち、運動のおもしろさを広げるため支援の工夫】	

H29・30 倉敷市研究校指定

5 運動領域の授業づくり

(1) 運動と「遊び」

運動は「遊び」の要素を含み、他者とのかかわり合いの中で行われる身体活動と捉える。「遊び」は、夢中になって、できるかどうか「わくわく」して活動するものであり、失敗しても何度でも意欲的に取り組むことができるものである。その、できるかどうか「わくわく」して活動することが遊びの本質であり、「おもしろさ」である。遊ぶ子どもの姿は、まさしく目指すべき運動する子どもの姿と重なっている。

「遊ぶ」という主体的な活動の性質からは、まず、「課題を与えられる」というのではなく、「自ら課題を発見する」という、課題解決学習が促される。つまり、できるかどうかと夢中になって取り組む子どもの姿からは、「自ら課題を発見する態度」が生まれると考える。この姿を、学習に当てはめると、「わくわく」する運動のおもしろさの世界の中で、やってみたいという「めあて」をもち、その「めあて」を変容させながら、運動に取り組む姿となる。さらに、運動のおもしろさとの出会いや、運動に取り組む中に、適切な教師の支援が入ることにより、学習がより深まっていくと考える。

まさに、運動領域の学習は、「遊び」の要素なくしては成立しにくいものと捉える。

(2) 「運動の世界」と「挑戦課題」

本校では、「ものとのかかわり」「仲間とのかかわり」「自己とのかかわり」という三つの視点から捉えた世界が運動（遊び）の世界であり、運動の本質的なおもしろさであると考えた。本校では、この運動の本質的なおもしろさを「運動のおもしろさ」と捉える。このような運動（遊び）のおもしろさを広げ、学びを豊かにするために、「もの」「仲間」「自己」を手がかりに支援をしていくことが、「めあて」をもち、子どもが夢中になって学び続けるのに必須だと考える。

「ものとのかかわり」

運動に必要な用具・器具や、それらを組み合わせた場、空間といった「もの」を手がかりに支援をしていくことで、「もの」によって引き出された動きや身のこなしなどを楽しむことができ、運動（遊び）のおもしろさを広げることができる。

「仲間とのかかわり」

グルーピングやルール設定、競争といった共に運動する「仲間」を手がかりに支援をしていくことで、仲間とのかかわり方が変化していき、運動（遊び）のおもしろさを広げることができる。

「自己とのかかわり」

練習の仕方を工夫したり、チームとしての作戦を実行したりして、運動のおもしろさに応じた「自己（個やチーム）」の技能を高めることを手がかりに支援していくことで運動（遊び）のおもしろさを広げることができる。

また、運動（遊び）のおもしろさに子どもが浸り、夢中になって学習し続けるには、核となる課題が必要であると考えられる。その課題は、運動の本質に迫るものであり、学習する子どもにとって、何を追究していくのか明確でなくてはならない。このような課題を「挑戦課題」とした。

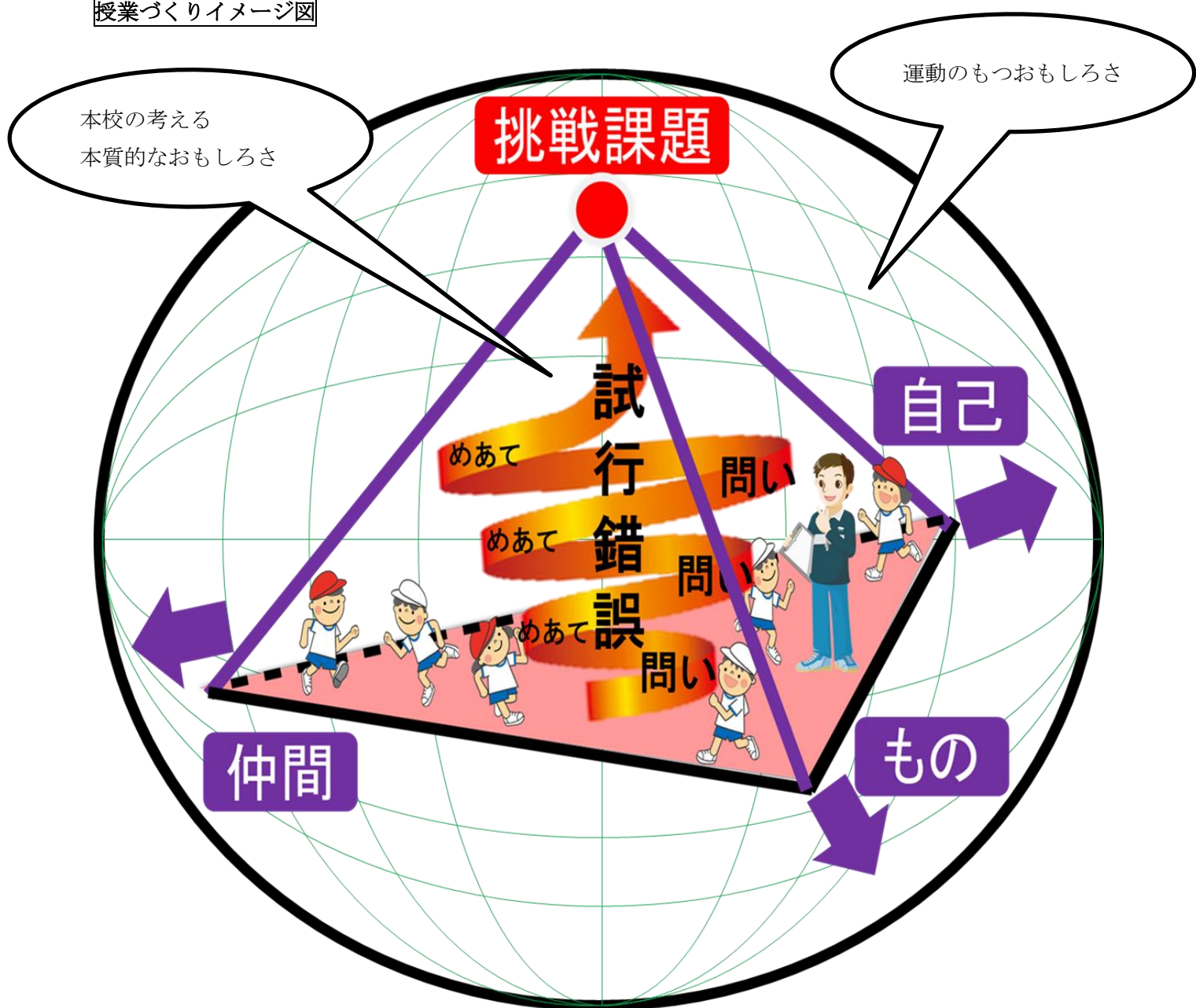
「挑戦課題」は、子どもが「〇〇なことに挑戦している」という出来事の意味が分かった状態で学習できるようにするものである。この「挑戦課題」をもとに学習活動を考えていくことで、運動のお

もしろさを体感し、子ども自ら試行錯誤をしながら課題を追究していく学びを構築できると考える。そのため、子どもが夢中になって追究し続けるオープンエンドな学びになるような発達段階に応じた課題を設定していく。

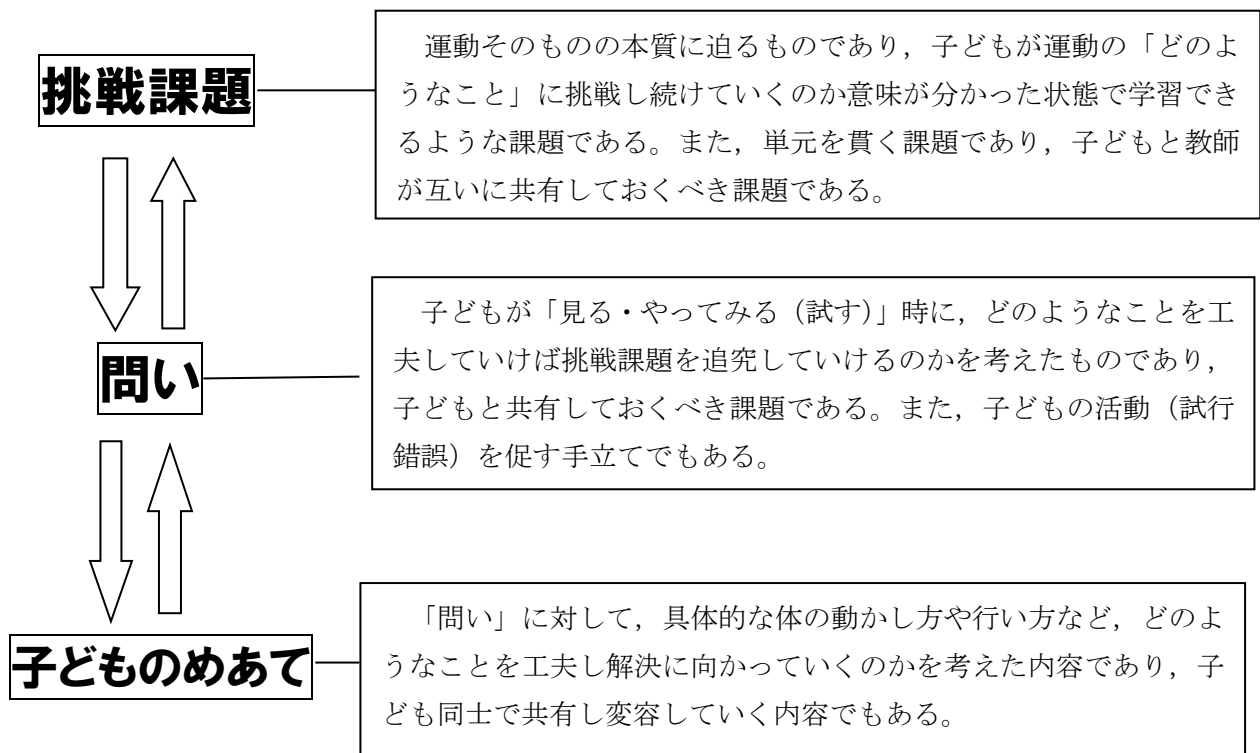
挑戦課題に迫るために、目的がはっきりとした状態で三つのかかわりの視点から支援をすることで、運動の本質的なおもしろさから外れることなく、おもしろさを広げることができるのではないかと考える。

さらに、子どもが学ぶことの目的や、意味、価値を見出したりする支持的風土を根底として、子どもが思わずやってみたくなったり、夢中になったりする学びの文脈を設定していきたい。そうすることで、子どもの思いと教師の意図にずれのない学習となり、「目指す子ども像」に迫ることができるのではないかと考える。

授業づくりイメージ図



(3) 「課題」と「めあて」の考え方



(4) 学びの文脈と子どもの学びの姿

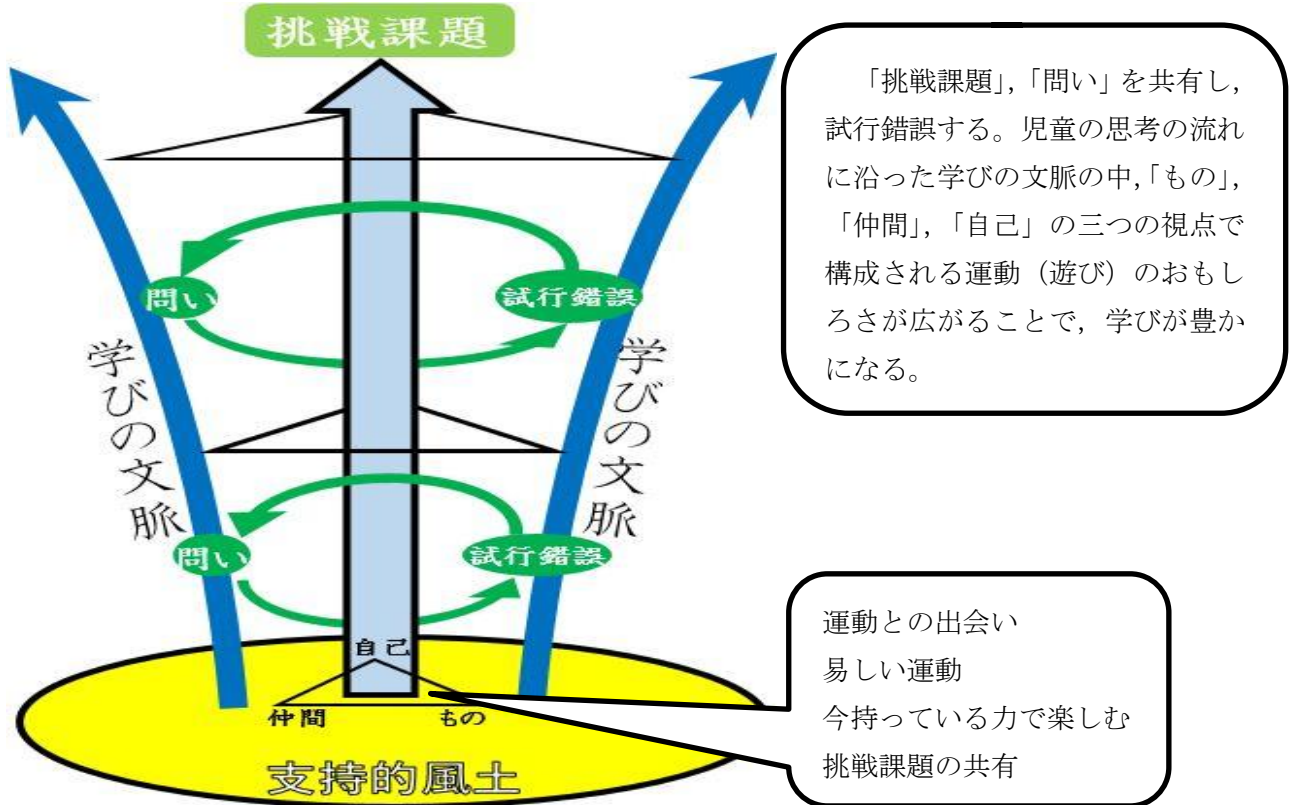
○ 学びの文脈づくり

学びの文脈とは、子どもが学ぶことの目的や、意味、価値を見出し、課題に対して身に付けた力を活用していく学びの過程と捉える。その学びの文脈をつくるにあたり、子どもの意識と教師の意図のバランスを大切にす。児童の実態と運動の本質的なおもしろさをもとにして、明確な試行錯誤する姿の想定やゴールイメージを描き、児童の思考の流れに沿った学びの文脈を考えていく。「○○をしなければならない」という文脈は、教師の意図が強く、苦手な児童にとっては苦痛な文脈であり、運動のおもしろさを十分に味わえない結果につながると考える。まずは、子どもが思わずやってみたくなる出来事や課題を設定し、それに夢中になって追究していく文脈を設定していきたい。

○ 運動との出会わせ方・合わせ方

学びの文脈づくりにおいて、単元導入時の運動との出会わせ方は、特に大切にす。それは、運動のおもしろさとの出会いであり、これから何を追究していくのか明確にしていくものである。この運動との出会いの中で、「挑戦課題」を、学習する子どもと教師が共有することで、運動のおもしろさを体感し、子ども自ら試行錯誤をしながら課題を追究していく学びを構築できると考える。また、運動をどう子どもに合わせていくか、単元全体を通して考えていく。毎時間の学習を評価し、子どもの実態に合った場やルール、チーム構成等、「もの」、「仲間」、「自己」の三つの視点で構成される運動（遊び）の世界を広げ、豊かにしていく支援を考えていく。

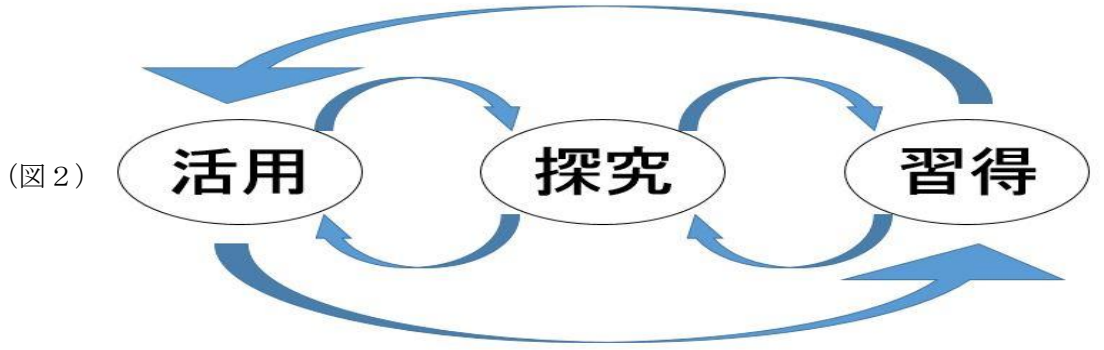
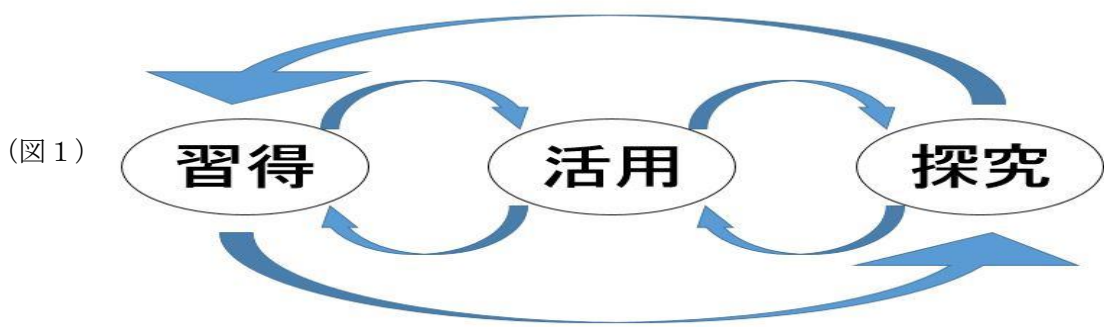
子どもの学びの姿イメージ図



(5) 学習過程の工夫

○ 学習過程の種類

基本的な知識や技能の「習得」から「活用」,「探究」という学習活動の一般的な類型(図1)だけでなく、「活用」する場面があり、「探究」する中で「習得」すべきものが明確になり、意味や必要性をともなって、結果、「習得」しているという学習活動の類型(図2)もイメージして学習過程を構築している。「習得」,「活用」,「探究」が相互に関連し合って、子どもの力を伸ばしていけると考える。



(6) カリキュラムの考え方

小学校での体育科は、生涯スポーツの一時期を担うものであり、それは、生涯、スポーツにかかわっていかうという資質や能力を育む、今後の繋がりを考えたカリキュラムでなくてはならない。「目指す子ども像」を設定し、発達段階に応じた資質や能力を育成するための体育の内容を考えると、子どもたちに身に付けさせたい「技能」を要に考えるのではなく、子どもの発達段階に応じた課題や行い方を要に系統的に考えていく。つまり、子どもの発達段階に応じた「わくわく」する課題や内容を設定し、夢中になって取り組む中で、その運動のおもしろさをより広く深く味わった結果として身に付く「知識及び技能」、課題を解決する際に必要となる「思考力、判断力、表現力等」、「学びに向かう力、人間性等」を系統的に考えた。「今、おもしろい運動」を意味とセットで積み重ねていくような学びを構成していく。

(7) 友達とかかわるための工夫

友達とかかわって、協働的に学んでいくことは、求められている資質・能力を育成するのに必須だと考える。協働的な学習は、話し合う時間や場を設定すれば成立するものではなく、課題に対して必然性をもって行われるものである。共有する同じ課題のもと、チームや個の「めあて」の共有の必要感や、多様な考えを取り入れる機会の必要感が生まれてくる学びの文脈を設定していきたい。その結果、対話的に学ぶことができるようになる。

ボール運動系の学習では、友達と協力して、チームとして課題を追究することが特に求められている。チームとして課題を追究する際、個の「役割」や「位置」などを手がかりに課題追究していくことが重要である。個が考えることが場や状況によって変化する特性上、場や状況に合わせた課題が必要である。「問い」が複数あるのは、そのような場や状況に際して、子どもが考えていくことを明確にするためである。「問い」が複数あることは、子どもにとって学びを易しくする手立てとなり、個が「役割」や「位置」を考えることで、チームとして課題を解決していることを実感できることになり、友達と共に学んでいくよさを実感することにもつながる。

また、ボール運動系の学習では、全員が技能的に同じことを経験し、習得していくことが難しい面がある。チームとして課題を追究していく際に、個の「役割」に適した技能を意味や必要感をともなうて身に付けることを目標とする。しかし、全員がそれぞれの「役割」を経験し、知ることにも課題追究には重要であり、技能習得が主たる目標ではなく、多様な考え方をもつための「役割」経験を単元によって組んでいきたい。そのことで、チームとしての「役割」の重要性を知り、チームの友達と認め合いながら課題解決することができるようになる。

さらに、チームとして課題追究をしていくためには、チームとしての雰囲気づくりが大切である。勝ち負けを競い合う特性、個人の「違い」があるチーム構成で、いかに、同じ課題に前向きに意欲的に向かっていけるか、チームづくりとしての「めあて」も発達段階に合わせてもたせていくことで、友達と共に学ぶよさを実感させたい。

(8) 試行錯誤をし続けるための支援

○ 声掛けの工夫

子どもが夢中になって課題に迫っている過程で、子どもをどう見取り、課題追究にいざなうかが大きなポイントとなる。その際、記録や勝敗などの目に見える具体的なことや結果だけを取り上げて声掛けをするのではなく、子どもがもっている「めあて」に対するわずかな動きや考えの変化を見取り、課題追究への過程を多様に広げたり、価値付けたりするための声掛けを意識していく。課題に対する試みの共通点や相違点を問い掛けたり、多様に考えるきっかけとなる価値の揺らぎがある声掛けをしたりしていくことが、子どもの好奇心をゆさぶり、深い学びへいざなうことができると考える。

○ 「見える化」

めあてに対する実感をともなった振り返りをしたり、学びの質を高めたりするために「見える化」を意識して授業を考えていく。

単に、試技を見合う環境や ICT を利用して自分の動きを見る環境を整えるだけでなく、やっている本人や周りの友達のだれもが分かる支援の工夫を考えていく。例えば、ハードル走で速く走り越すために、バーをより低く走り越そうという「めあて」をもった子どもにフレキハードル(図3)を使用させることで、バーに当たったかどうかを、みんなが見ただけで共有することができるようにすることである。そのことで、友達や教師からのアドバイスが生まれ、本人の動きの変化の気付きにもつながり、より深い学びへつながると考える。



(図3) フレキハードル

また、子どもの学びの過程を「見える化」していく。共有していった知識や自分の振り返りが、いつでも必要に応じて見られるようにしておくことで、新しい「めあて」をもつための手立てとする。特に、低学年では、オノマトペで語ってくる子どもの考えや動きを、発達段階に即した言葉で表し、意味付けて共有し、掲示することで、知識の共有をしていきたい。子ども

たちとたどってきた学習の過程や共有していった知識を「見える化」し、学習の深まりを実感させていきたい。

○ 「追究のための手がかり」の精選

子どもが課題追究をする中で、具体的な「めあて」をもつためのポイントとなる「追究のための手がかり」を考えていく。この「追究のための手がかり」は、子どもたちが試行錯誤する中で有効に働くものであり、活用していくものである。また、子どもたちと教師が共有していくものであり、子どもたちにとって「課題」と「めあて」をつなぐ大きな役割になるものである。発達段階に合わせて、教師側から提示したり、子どもたちと共有しながら増やしていったりして、試行錯誤の幅を広げる手立てとしていきたい。そのためにも、「追究のための手がかり」の内容が、子どもにとって必要感があり、「夢中になる」ための手立てになっているか、精選していく。

6 保健領域の授業づくり

(1) 保健領域の特徴

① 子どもの実態

保健領域の学習内容は、子どもたちの実生活と密接にかかわっている。未習事項であるが、生活経験からすでに知っていることや実践していることが多分にある。さらには、子どもたちの生活環境の違いから、知識や経験の有無などの個別性があり、学級内に混在している。それらの実態を踏まえ、保健学習を通じて、生涯にわたって健康を保持増進する子どもの育成を目指すことが大切であると考えます。

② 求められていること

体育・健康に関する指導を、学校の教育活動全体を通じて適切に行うことにより、健康で安全な生活の実現を目指した教育の充実が求められている。また、日常生活において適切な体育・健康に関する活動の実践を促し、生涯を通じて健康・安全で活力ある生活を送るための基礎が培われるよう配慮することが大切である。そのために、教科等横断的な視点からカリキュラムを編成することが大切であると考えます。また、中学校・高等学校へつながる系統性を十分に考えることも必要である。

以上を踏まえ、身近な生活における健康・安全についての理解と技能を身に付けるようにする「知識及び技能」、健康についての自己の課題を見付け、その解決に向けて思考し判断するとともに、他者に伝える力を養う「思考力、判断力、表現力等」、健康の保持増進と体力の向上を目指し、楽しく明るい生活を営む態度を養う「学びに向かう力、人間性等」という三つの目標を密接に関連させながら、授業づくりをしていく。

(2) 本校での取組の特徴

① 学習の目標・内容の明確化

○「何ができるようになるか」

保健領域において、「何ができるようになるのか」を明確にした。各学年の発達段階で、ずっと健康な生活を送るための知識を身近な生活における場面から習得し、その知識を自分の生活に活用できることをねらっている。知識においては、現在の生活に生かすことができなくとも、この先のライフステージにおいて使える知識であるならば、価値ある習得であると考えます。つまり、今もっている知識に、新たに獲得した知識や、健康に関する情報などを結び付けながら習得していくことで、自分なりに知識を構築していくイメージである。自分なりに構築した知識だからこそ、自分の生活と照らし合わせ、行動変容のための具体的なアイデアをもつことが容易になると考える。

○「何を学ぶか」

保健領域の学習だけでなく、体育や特別活動などの学習と関連付けた横断的なカリキュラムを組むことが欠かせない。現代的な諸課題に対応して求められる資質・能力の育成にあたり、保健領域の学習だけで完結することは難しい。学ぼうとする意欲付けのための活用場面や学習のアウトプット先などを他教科との連携を図って設定することで、より学びを深めることができると考える。また、家庭や地域社会との連携を図りながら、活動の実践を促していくことも大切である。

○「どのように学ぶか」

・ 課題について

保健学習において、子どもたち自身が「めあてを達成したい」「内容を学びたい」という意欲をもつことが重要である。まず、子どもたちが「疑問」をもつことで、知的好奇心が掻き立てられ、学びがスタートするのではないかと考えた。「なぜかな?」「どうしてかな?」と「わくわく」する疑問があるからこそ、子どもたちはめあてをもつことができ、探究し続けることができると考える。

その疑問から、単元を通して健康や安全に着目し、自発的に疑問をもって探究し続けられる課題として「健康課題」を設定した。この「健康課題」に迫るために具体化した課題を「問い」と設定した。「問い」の内容と順序を子どもの思考に沿わせることで、学びが活性化され、探究し続けられると考える。また、学びの文脈作りとして、活用の見通し→習得→活用という学びの流れを意識した。何のために学習をするのかを明確にすることで、子どもの学習意欲を大きく引き出すことができると考える。健康課題の設定と学びの文脈づくりが、主体的な学びの実現につながると考える。

・ 学習方法について

知識や技能の習得においてどのような過程を経ているのかを重視するため、グループで課題解決をしていくことが効果的であると考え。「教師が教える」から「子どもが学ぶ」ことへの転換という視点からも、子ども同士の共有や話し合いは不可欠である。つまり、個人がどれだけ知識や技能を習得したのかではなく、集団の中でどのように知識を共有し、構築していったのか、個人の考えが集団の中でどのように相互に作用し合ったのかを大切にしたい。そのための手法は多様であるが、あくまで手段であるため、目的になることがないように留意することが必要である。子どもたちが対話的に学ぶからこそ、知識の構築がより促進するものと考え。

・ 教師の支援について

学習活動や学習方法を工夫するとともに、子どもたちが課題を追究し続けるための工夫も必要である。本校では、工夫の視点として、「自分を見つめて」「仲間とともに」「環境にはたらきかけて」という3点に整理した。

「自分を見つめて」とは、多くの人に共通する理想的な健康像に迫っていくのではなく、個々の実態に応じた課題を発見し、解決していくための支援をしていくことである。そのために、生きて働く知識及び技能の習得や生活に活用する力の育成のための支援が挙げられる。

「仲間とともに」とは、対話的な学習を通じて個人の生活環境を理解しながら、よりよい解決方法を追究していくための支援である。学習方法の工夫やグルーピングの工夫が挙げられる。

「環境にはたらきかけて」とは、物や人、場所などとかかわり、子どもの学びがより活性化するために必要な支援をしていくことである。コンピュータや資料、ゲストティーチャーなどが挙げられる。

以上の3点の視点を意識しながら、必要に応じた支援を考えていくことが、より深い学びにつながるのではないかと考える。

- ・ 振り返りについて

振り返りは学習の振り返りだけではなく、知識や技能を習得した後、自分の生活に結びつけて振り返ることも含まれる。つまり、これからの自分の生活にどのように活用し、行動変容へとつなげていくのかを大切にすることである。そのために、保健の「見方・考え方」を働かせる必要がある。学習したことで構築した知識をもとに自分を振り返り、新たな課題に気付いたり課題を見付けたりする中で、より健康を意識した振り返りができるようになることが学びの出口になると考える。知識の習得に終わることなく、その知識のもつ意味を十分に理解することで、表面的ではない意味を伴った行動変容につながると考える。この意味こそが興味深い内容であり、追究していく価値の高いものであると捉えている。知識を構築し、見方・考え方を働かせて行動変容につなげていくことが、深い学びになるのではないかと考える。

② 評価の充実

授業づくりにおいて子どもたちの学びをどのように評価していくのかについても併せて考えていく必要がある。評価を支援に生かすことで、子ども自身が学びを振り返って、次の学びに向かうことができるようになる。子どもたちの深い学びのためにも、評価の充実は欠かせない。

従来の評価の観点である、「知識が理解できたかどうか」だけでなく「どのように知識を理解していったのか」「前の学びからどのように成長しているのか」のような、学びの過程を評価することが大切であると考えられる。さらには、教師だけでなく子ども自身が自らの学習状況を振り返り、評価することができるような学習活動も意図的に取り入れることが必要である。評価は、その後の子どもたちの学びの方向性を示すものであり、教師の評定のための評価をすることがないように留意したい。子どもたちの学びを的確に捉えるためには、振り返りカードの活用や、話し合い活動の導入など、学習の内容をアウトプットすることが必要である。学習活動の中に意図的に仕組むことが大切であると考えられる。

学びの過程を評価するためには、子どもたちが何をしようとしているのかを教師が見取り、適切な支援をしていく必要がある。課題のもたせ方や課題との出会わせ方など、子どもの思考を追いながら設定することも大切であると考えられる。指導と評価の一体化を意図的に仕組むことが重要である。